al Ltd., New York, 1985, pp.141–142.

(10) Van Over, Raymond, Eastern Mysticism, A Mentor Book, New American Library, New York, 1977, pp.342–343.

(11) Zaehner, R. C., Mysticism, Man, Myth and Magic Magazine, 69, BPC Publishing Ltd., St. Giles House, 49 Poland Street, London WI, 1971, pp.1930–1932.

(12) Underhill, Evelyn, MYSTICISM, University Paperbacks, Methuen, London, 1960 (1911), p.38.

(13) Hamersma, Harry, Tokoh-tokoh Filsafat Barat Modern, Penerbit PT Gramedia, Jakarta, 1983, p.122.

Kewal Krishan Mittal（ケワル・クリシャン・ミッタール）

一九三一年生まれ。パンジャブ大学で哲学博士の学位を取得。現在、デリー大学教授。専攻、インド哲学。主な著書『Materialism in Indian Thought』『Point of Views』（全五巻）他。

一　はじめに

西洋文明はヒューマニズムを基礎として宗教を従属させ、完全に物質主義を指向してきた。もしわれわれが宗教をして真の使命を完遂せしめるように助けることによって、物質主義とヒューマニズムを克服し、東洋の宗教の霊的活力を現代世界に顕現させていくことができるならば、われわれは現在陥っている文化的危機から人類を救出することができるであろう。

しかし、物質主義とヒューマニズムの克服は、それらの完全な拒絶や隷属化という形でなされるべきではなく、それらに対して、事物と観念の構成においてそれらに正当な位置を与えながら、和解という形でなされるべきものと私は確信している。唯物主義者たちも神の創造物であるから、彼らにも神の愛を十分に与えながら、統一思想の唯一神観的解釈と一致させてくいくべきである。

私の意味するところは、全宗教の統一のために必要とされる和解の精神は、既に統一運動の中に存在しており、統一されるべき宗教は、多神教、単一神教、汎神論的な解釈ばかりでなく、非有神論的な解釈をも認めるヒンドゥー教の各教派をも含むということである。一元論的ヴェーダーンタ哲学は唯一神の範囲を超えており、ジャイナ教と仏教は双方ともに神を認めない宗教である。しかしヒンドゥー教は、それら（ジャイナ教と仏教）なしで考えることはできない。ヒンドゥー教はさまざまな有神論的解釈のヒンドゥー教ばかりでなく、ジャイナ教と仏教の中のヒンドゥー教もまた真の意味で宗教と呼べる生き方を代表しているという

ことは依然真実である。

二　息子アニルッダへの手紙

同じことを説明するために、私が世界宗教議会参加中にニュージャージーから息子に送った一通の手紙を紹介しよう。

親愛なるわが息子アニルッダへ

聖恩感謝

「古き伝統の回復」というテーマの「世界宗教議会」に参加し、感動し勇気づけられ、私は今、ヴェーダ哲学、パウラナ哲学、シヴァ崇拝、シャークタ派、ヴィシュヌ派、ジャイナ教、仏教、シーク教の伝統をも含めて、ヒンドゥー教の伝統のいくつかの基本的概念について執筆しつつある。

ダルマ（Dharma, 法則）はわが伝統の中で最も重要な概念である。ダルマについては、有名な仏教教典であるダンマパダ（Dhammapada, 法句経）の中に記録されている。

「敵に敵対することで敵に勝つことはできない。敵に勝つことができるのは、ただ敵対すること自体を滅することによってのみである。これこそが永遠のダルマ（法則）である。」

この「滅・敵対」はすなわち「友好（Maitri）」以外の何ものでもなく、それは生活の中において、

平安（Upeksa）、歓喜（Muditā）、慈悲（Karunā）を伴い、それらと釣り合い調和するときにこそ、この「滅・敵対」という表現は見いだし得る。これらの四つ（友好、平安、歓喜、慈悲）の姿勢がうまく調合された生活こそが、仏教が奨励するところのいわゆる「ブラフマヴィハラ（Brahmavihāra, 精進）」（健康で幸福で有益な精神生活）である。そういう理想的な形の生活は、ヒンドゥー教等の他の宗教にも是認され、受容されている。

シーク教の創始者であるナーナカ導師（Guru Nanaka）は、「柔和と謙遜の性質は善の本質をなす」と語っている。柔和と謙遜の性質を持つ人というのは、つまり友好的で、平安で、慈愛と歓喜に満ちた人であり、あるいは真理、不盗、不執着、不欲を実践する人である。

すべての生命が関連し合っているというのは、わが伝統において強調されてきたもう一つの考え方である。仏教によれば、例えば世の中で苦しんでいる人というのは、自分自身を孤立した存在だと見ている人、つまり「縁起の理法」の真理を認識できないでいる人なのである。そういう人のことをパーリ語では、「プトゥージャナ（Puthūjana）分離された人」と呼ぶ。パンジャブの偉大な詩人であり、尊敬されたシーク教の篤信者である故・ヴィル・シンガ乞士（Bhai Vir Singa）は、真っ黒な石炭を擬人化して「排他性」を表現している。

「石炭を石鹸で洗っても、ミルクやカード（擬乳）に入れても、漂泊剤と一緒に煮ても、
その色は変わらない。
分離から来る暗黒は、結び合うことなくしては、どうしようもない。

石炭を火の中に投じて見よ。何と明るき光を放つことか。」

あるものが醜悪で悪となるのは、それが誤って配置されたことによる。すべての事柄を正しい位置に配置してみたときに、価値なきもののように思われていた事柄が、いかに巨大な価値を持っているかを、自分たちの目で見てみよう。ただ捨てられている糞尿でも、肥料となって甘い香りの花を育てることができる。万物を正しく手入れし主管すべきことは、今日の環境科学が強く訴えるところだけではなく、われわれの古来の宗教文化的な伝統が訴えているところでもある。人間にせよ、動物にせよ、鳥にせよ、どんな形の生命にせよ、われわれはそれを聖なるものと見ており、そして、われわれは木や石でさえも崇拝している。

われわれの古代の聖賢たちは、ダルマの代わりにアダルマ（adharma, 罪悪）に従うことの空虚さについても指導を怠らなかった。ノーベル賞を受賞したわが国の詩人、天の導師ラビンドレ・ナト・タゴール（Gurudeva Rabindre Nath Tagore）は、一九二四年の中国での演説の中で、次のような洞察のある意見を述べている。

「アダルマ（罪悪）によって人は栄え、
その野望を遂げ、敵を征服しても、
しかし、根元から滅びゆく。」

われわれは死んでも、しかし滅んではならない。われわれの理解によると、死は生命の連続した流れの中の一段階である。それは現世の人生の終わりであるが、次の人生への前触れに過ぎない。滅びるこ

となき永遠の存在として生きることへの絶えざる希望故に、われわれはダルマの道において生活する努力を続けるのである。

敬具

三　ヒンドゥー教の伝統の全体的な観察

ここに書き写した手紙の中で示唆されている内容については、ジャイナ教、仏教、シーク教の宗教的伝統を全体的なヒンドゥー教の伝統の中に含めることに関して、私が述べたことの中の一つを取り上げなければならない。

私がそのように述べたのには二つの理由がある。一つは外的な事実に基づくもので、ごく簡単にいえば、「ヒンドゥー」という名称は、古代の地理的にもまた歴史的起源からいっても、「インド」という名称と同等であり、よって「ヒンドゥー教」の名称を「インド教」に変えることは何も難しくはなく、だれも反対できないし、また反対しないということである。

第二は内的な事実に基づくもので、少々議論を要するかも知れないが、その議論を始める前に、次のことを前置きしておきたい。最近は、ある方面ではジャイナ教と仏教とシーク教はヒンドゥー教に類似した（しかし別な）宗教と見なされているが、私は個人的には、ヒンドゥー教のヴェーダ、ウパニシャドおよびパウラナ（ヴィシュヌ、シヴァ、シャークタ）などの諸教派（およびその系統の幾多の派生教派）、およびジャイナ教、仏教、シーク教をもヒンドゥー教と見なしている。そしてそれらはそれらなりに最善の方法でヒンドゥー教を代表している。しかし、それらの間に統一と調和が見られる限り、それらを別々な宗教として捉

えることに私は反対しない。

(1) 諸宗教の友好的共存への努力

そこで論点は、インドが何世紀にもわたって、主要なすべての世界宗教の揺籃の地となってきたということは、再言を要しないほど事実である。中でも四つの世界宗教、すなわちシーク教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教は、その発祥自体をこの国においている。それらは全体的には異なった哲学的外観を呈しつつも、自然と相互間において多くの点で共通の信仰観を有している。

それらは、通例あるいは全般において、全く異なった信仰の追求をしてきたが、われわれは何とか仲よく共存してきた。紛争や衝突はあったとしてもごく数少なく稀れであり、また例外的にあったものも、お互いの信仰の正統性を主張し合って起こったというよりは、どちらかというと、宗教を超えた緊張によって引き起こされたものであった。外見上は宗教の違い故に分裂しているように見えるインドではあるが、その精神は曇らされることができなかった。それは、いまだにインドを一つの世俗の国家形態に過ぎないものと規定している国家宣言からも明白である。

消極的にいえば、インドの国はさまざまな異なった信仰を公明正大に扱ってきた。何人も、信仰信条故に差別されるというような悲劇を繰り返してはならないという約束を、取り戻し保持するために、最大の努力を払ってきた。積極的にいえば、インド人たちは、あらゆる宗教が本質において同一であると考えてはいないにしても、少なくともすべての宗教を尊敬するという理想は信奉している。

(2) ガンディーの祈禱会の伝統

この積極的な見解を持っていた最も偉大なチャンピオンは、マハトマ・ガンジーであった。彼の行った祈禱会においては、すべての信仰の教典からの引用句節が読まれ、「多様性の中の一致」「調和」「全面友好」「全存在への情愛」といった事柄が確認された。われわれは、愛他主義、つまり他を助け、そして争いの原因となっている「執着（raga）」「憎悪（dvesa）」「傲慢（moha）」といった言葉で表現されるようなエゴに反対するという、非常に長い歴史の、強い伝統がある。次に挙げるような声明は、和解や寛容のみならず、調和や受容の精神を強調している。

「敵やよそ者というものは存在しない。
われわれに対して友好的なものは、すべて仲間である。」
「ほむべきかな、導師ナーナクの神よ、いと高きところにましますの神よ、
すべての存在に慈愛を賜りますように。」
「はじめに神は光を造りたまい、
そして、あらゆる自然万物を造りたもうた。
一つの光から世界全体ができ上がったのに、
誰が善で、誰が悪だというのだろうか。」（吉祥導師グラント・サーヒブ）

以上は、シーク教の教えからとった有名な言葉である。次に仏教の教えを引用しよう。

「寛容と許しは偉大な悔い改めをなす。
ブッダは、ニルヴァーナ（涅槃）こそ究極なるものと宣言する。
他を殺したり苦しめたりする者は、沙門（Śramana,求道者）たり得ない。」
（ダンマパダ（法句経）一四／六）

「怒らぬことをもって怒りに勝ち、
礼をもって非礼に勝つ。
施すことをもってみじめさに勝ち、
真理をもって偽る者たちに勝つ。」（ラジョヴァダ本生経）

次には、ジャイナ教から拾ってみよう。

「賢人は、非暴力、真理、不盗不淫、節制、精進の偉大な誓約を生活の中に実現し、バグヴァーナ・ジネスヴァラ（Bhagvāna Jineśvara）師の教えに従うべきである。」
（ウッタ　ディヤヤナ経　二一／二一）

「自分自身に対するように、あらゆる生命ある存在にも同様に対せよ。」
「自己主管にたけた人は、誰に対しても敵意や反抗心を表すべきではない。」（ジャイナ経典）

ヒンドゥー教の代表的な信仰観は、次のような名言の中に含まれる知恵が示すように、精神向上を導くものである。

「あらゆる存在は幸福であれ、すべての聖人たちは不滅であれ。
すべては何処においても善であれ、苦悩を消滅せしめよ。」
（有名なヴェーダ経典の祈禱の一つ）

「十八のパウラナ広説が教えているのは、たった二つの考え方である。
他に善くすることは称讃に値すること、
責められるべきは他を害すること。」（ヴィシュヌ教格言）

「他人の妻を母のように、他人の富を一塊の土地のように大切に扱え。
すべての存在を我がこととして考えよ。
そのように考える者は知恵ある者である。」（ニーチの教え）

「他人の困窮を知ったら、その苦しんでいる人に善行を施し、それでいておごり昂ぶる心を自分の中に入れない者のみが、ヴィシュヌ教徒と見なされる。」

（グジャラチの反復句）

四　全宗教の統一融和の必要性

（1）諸宗教の共通の伝統

わが国固有の主要な四大宗教の聖なる教えから引用した以上のような言葉は、枚挙にいとまがない。そこで重要なことは、そういった言葉の一つ一つが、これらの宗教の信徒たちの意識の中に深く根を下ろしていることである。どの信仰もその独自性を明らかにし得るし、そこには何の排他性もなく、共通の伝統を分かち合っているという哲学の中に深く染み込んでいる。

リグヴェーダにおいても、「真理は一つである。しかし真理を学ぶ者たちはそれをさまざまに表す」と記されており、その趣旨を同じくしている。天来吉祥導師ナーナク（Sri Guru Nanak Dev）も、「はじめに真理だったものは、時代を経ても真理であり、そして永遠に真理であるはずである」と述べ、同じことを確認している。

（2）現実における誤りと分裂

しかし、リグヴェーダもナーナク導師も、現実世界においては明らかに偽りや誤りが優勢であり支配的であることに、気付いていないわけではない。完璧な指導を与えてくれたナーナク導師は、一人の乞士ラロ（Bhai Lalo）を通して、人生においていかに偽りが優勢で支配的であるかを、われわれに警告してくれている。その説を見ると、「ああラロよ、非真理が支配しているのだ」という言葉が繰り返されている。師自身の使命が、人類を非真理の暗黒から真理の光明に導くことにあったために、師は人々に対して堅く、「究極の真理は、今や国民のモットーになっているヴェーダのみ言葉にあるように、一点も崩れずに永遠に存続するものである」と確認している。

約三十五年前、私はパンジャブで一篇の短い詩を書いた。

「嘆かわしいことに、今日の世界は分裂し争い合っている。
万物の価値は高まっても、人間の価値は堕落している。
人間性は眠り、代わって獣性が安息所を支配する。
人間存在がその深い眠りから醒めない限り、
愛の代わりに、嫉妬と悪意が心にはびこる。
日々新たな争いがあり、新しい嵐がつくられる。」

その当時、私は社会的政治的分裂を憂えていたのであるが、今日ではその状況はさらに悪化している。あ

る者たちは、各々の政治的野望を遂げるために、かえって宗教の不一致をあおって、それを利用するにまで至っている。

しかし各々の大宗教が、各々の方式で正しく理解されるならば、人々の間に信仰の多様性を許容しながらも、最も調和のある深遠な思想が生まれるはずであると、私は堅く信じている。

われわれに必要なのは、Dina-e-Illāhi of Akbar のように、ゴッタ煮のような混交思想をつくり出すことではない。またある種の政治理念が説くような、非宗教・反宗教的な世俗主義の名の下に、宗教への関心を失うことでもない。われわれに必要なことは、シーク教、仏教、ジャイナ教、ヴィシュヌ教等へのわれわれの帰依意識を各々の方法で実現し、現実にある分裂に代わって、全存在の統一融和を具現化することである。

(3) ジャイナ教の不定主義

ジャイナ教は元来、複数の多様的世界観（Anekāntavāda）を持ち、「不定主義」（Syād-vada）に準じて、どの見方も総体的真理の一部である限りにおいて、その正統性をあまねく認めるという姿勢をとっている。そして「一を知る者はすべてを知り、すべてを知る者はまた一をも知る」という真理が、クンダクンダーカーリャ（Kundakundacarya）によって説かれている。ジャイナ教徒がこのように多様性をそのまま受け入れるならば、次のような言葉の中にその信仰観を表している不二一元論者と本質を同じくすることになる。

「あれ（parabrahma）も充にして、これ（Sopādhika Brahma）も充。

森羅万象の充は、原因者の充より発する。
この充の充たること（明らかなる多様性）は、原因者の充より取り出されたときに、
それ自身の充たるに戻る。」

（ブルダラニャカ・ウパニシャド R・一／一）

(4) 仏教哲学の精神

仏教哲学では、すべての存在を、諸行無常（Anityatā）、諸法無我（Anatmatā）、縁起理法（Prattya-Samutpāda）をもってとらえる。つまり、すべての存在は実存し（「説一切有部」Sarvāstivāda）、「生・住・異・滅」（Catuskoti vinirmukta）の四つのカテゴリーに属し、なおかつ「空（Sūnyavāda）」であるという。そして、「唯識（Vijnapti-mātratāvāda、Vijnānavāda）」によってのみ、他の宗教の信徒たちと完全に調和し、友好（Maitri）、慈悲（Karūna）、歓喜（Mudita）、平安（Upeksā）の釣り合いのとれた、いわゆる「梵住」（Brahmavihara, 聖人の境地）の人生を生きることができると説いている。

シーク教の調和を愛し分裂を憎む精神は、先程の書簡の中に引用された「石炭」という題の詩を通して、故・ヴィル・シング乞士によって表現されている。

(5) 宗教間の正しい関係

宗教間の正しい関係において必要とされるのは、まず何よりも自らの信仰への帰依意識である。シーク教

徒ならば、真の指導的シーク教徒でなければならない。仏教徒ならば、凡夫（Puthūjana）を脱して、初果（Sottāpanna）、一来（Sakadāgami）、不還（anagami）の三段階の修業を経て、聖者（Arhat）として完成し、真の仏教徒たらねばならない。ジャイナ教徒も、無益な悪業（pāpakarma）に縛られた生活（jiva）を脱して、離欲（Vītarāgatā）を目指して善行を行う者（punyakari）とならなければならない。ヒンドゥー教徒も、真のヒンドゥー教徒となるには、利己的人間（Laguceisa）から利他的人間（Udāracarita）にならなければならない。

このように、真の宗教者となるならば直ちに、自らが所属するところの人類一大家族、サンスクリット語でいう「Vasud-haiva Kutumbakam」（全地を覆う一大普遍家族）の真理を実感することができるであろう。

（6）シーク教の調和の保証

ヒンドゥー教のヴェーダ・ウパニシャド哲学、およびパウラナ哲学、ジャイナ教、仏教、シーク教が各々用いている経典は、数も多く分かれてはいるものの、それらの宗教間の調和は、それらの経典によって十分に保証され補強されている。

シーク教第一サーヒブ指導経典は、西暦一六〇四年に第五代アルジャン・ディヴ導師によって集められ、一七〇五年になって、第十代ゴービンド・シング導師によって編集し終わったものであるが、その内容は、全宗教の一致というヒンドゥー精神を独特の形で証したものである。一四三〇頁のその標準経典には、シーク教の六大導師の言葉のみならず、ヒンドゥー教の信仰者やイスラム教の聖者、スーフィー教の詩人、その

他、真理と愛を求めて神霊に触れた魂の作品も含まれている（Punjabi 大学 Patiala 出版 "Guru Granth Ratnavali" 二八頁参照）。シーク哲学はその本質において、宇宙の生成と実体の究極的本性についての古代インド思想と、完全に主旨が一致するものである。（同二九頁参照）

シーク教第二ダシャム経典（The Dasham Granth）には、第十代ゴービンド・シング導師の作品が載せられている。この導師は、「汚れなき存在（Khalsa）は崇高なる教導（Wahe Guru-God）と完全に一致していたが故に、勝利（Fateh）しているという考え方」を記し、これは彼の時代から今日に至るまで、シーク教徒の挨拶の言葉の支えになっている。この第二ダシャム経典は、第一サーヒブ指導経典とともに、二十世紀に入って一九二〇―三〇年代に至るまで、すべてのシーク教寺院（Gurudwara,指導所）において崇敬を独占してきた。特に重要な句説は毎日繰り返して詠じられ、今日まで全シーク教徒が毎朝毎夕唱和するように薦められてきた。

（7）ヒンドゥー教の理想と家庭生活

しかし、このダシャム経典は、あってはならないある歴史的政治的理由によって、その位置を退いている。どういう状況かといえば、ある学者たちによって進められている「宗教的説明」という完全に不当な解釈があり、私はこれに断固反対している。これは、ダシャム経典には、女性の性質を過度に性的存在として描いている部分があり、聖典に含まれるには好ましくないという解釈である。

これに対する私の意見は、性を罪深いもの、あるいは、汚れたものとしてとらえるのは、ヒンドゥー教の

倫理とは無縁のものであるということである。ヒンドゥー教の神聖なる古典とされているラーマーヤナ、マハーバーラタ、パウラナのみならず、ヴェーダ、ウパニシャッドにおいても、熱烈に性愛を描いた説話を多く含んでいる。ヒンドゥー教の説話の多くにおいては、義（Dharma）、経済的幸福（Artha）、欲望の充足と性的満悦（Kāma）、救済や解放（Moksa）を求める調和の理想が奨励されている。仏教やジャイナ教はあまりに理想を強調したために、その実践面において僧侶宗教に陥ってしまった。しかし経典においては、家庭人としての宗教生活を薦め、そして家庭生活の中心的基礎は、性にあるとしている。

特にシーク教は理想として（個人の）救い（Moksa）を強調することが一番少ない。そういう意味でシーク教は、過度の禁欲主義に対する必要な修正を備えている。導師たち自身が家庭生活を送っていた。

私はこの点に、ヒンドゥー教と統一運動を進める宗教との、大きな類似点を見ることができる。それは、文師自身が結婚をして家庭を持っている人であり、文師の教会の多くの宣教師がそうであるというばかりでなく、統一思想によって提起された創造の説明の中に、「罪と堕落」の神話についての強調がほとんどないためでもある。（もっとも、今日の人類の共通の一組の親については、そのことが広く言及されてはいるが。）その上、シーク教は、統一神学が強調しているのと同じくらい、創造神（Katta Perkh）の存在を強調している。しかし統一神学とは違って、シーク教は世界を、主ご自身が永遠であるのと同様、永遠な「その真理なるものの現実の演技」であると主張する。この見解は、世界には初めもなく終わりもなく、創造主としての神も必要でなく、創造された特定の日も、最後の、審判の日（運命の日）も必要でないとする、仏教やジャイナ教の見解と極めて近いものである。その上、その世界の存在者の様子（あらゆる仕方の形や姿）は、そ

れ自身の所業によって決定されるが、救いは神の恵みによってのみもたらされるという具合に、この世界にある程度の自律性を認めるが、それはこの土着の宗教との真の類似性を再確認させるものである。

五　ヒンドゥー経典

話をヴェーダ・ウパニシャド哲学、パウラナ史詩、仏教、およびジャイナ教諸経典に移行する。

(1) ヴェーダの種類

最も古いヒンドゥー経典はヴェーダである。しかし、ヴェーダはただ単に経典の役目だけを果たしているわけではなく、何世紀にもわたってあらゆる地方から集められた文学作品の集大成でもあり、またその中では、筋道の通った論理学的展開もなされ、総じて明確な調和が醸し出されている（『インドの文化的遺産（The Cultural Heritage of India）』第五巻「言語と文学（Languages and Literatures）」参照。ラーマクリシュナ宣教文化研究所（The Ramakrsna Mission Institute of Culture）の出版。カルカッタ・一九七八年。十三頁）。これは次の四部に大別される。

(1)　本集（Samhitas）―これには次の四つがある。

①　リグヴェーダ本集（Rigveda Samhitā）

ここでは、一〇二八篇の讃歌（Sūktas）が、十の曼陀羅に分けられている。宗教儀式、および哲学関係の内容も多く含まれている。

② サーマヴェーダ本集（Sāmaveda Samhitā）

これは一五四九の呪願（mantras）を有し、そのうちの七八篇以外はすべてリグヴェーダ本集の、特に多くは第八および第九曼陀羅から引用したものである。さまざまな太陰（Soma）の犠牲祭で、讃歌僧たちが唱和した呪願詞を集めたものである。

③ ヤジュルヴェーダ本集（Yajurveda Samhitā）

サーマヴェーダと同様ヤジュルヴェーダも本質的には儀式的性格を持つが、サーマヴェーダが太陰犠牲祭のときのものだけに限られているのに対して、ヤジュルヴェーダは犠牲祭一切を取り扱っており、これについてもリグヴェーダの曼陀羅との重複がある。

④ アタルヴァヴェーダ本集（Atharvaveda Samhitā）

これはさまざまな異質の呪願の集合である。多様性に富んだ面白さと、他を圧倒するインパクトを持つ。魔術的呪文も中には時たま含まれている。高度に神智に満ちた哲学的逸品である。

(2) ブラフマナ経典（Brāhmana Granthas　祭儀書）

ヴェーダの経典の多くは、伝統的に「ブラフマナ（Brahmanas―在家信徒に儀式の手順を説明する散文調の作品）と呼ばれる。

(3) アーラニャカ（Aranyakas 森林書）

これは居山林（Vānaprasthis 森林に住む行者）のための指導書であり、ブラフマナ（祭儀書）の儀式主義から、ウパニシャドの精神主義への変遷が記されている。

(4) ウパニシャド（Upanisad 奥義書）

これは、師が生徒の近くに座して教えるという形式で書かれた奥義書である。これは最近の作品も含めて、二百以上のウパニシャドがある。Muktikupanisad には一〇八の伝統的奥義書のリストがあり、その中の十がリグヴェーダに、十九がスクラ・ヤジュルヴェーダに、三二がクリシュナ・ヤジュルヴェーダに、十六がサーマヴェーダに、そして、三一がアタルヴァヴェーダに属している。普通、その中の十三のウパニシャドが主要奥義書と見なされている。

(2) ヴェーダの本質

C.Kunhan Raja は『ヴェーダ宗教の本質（The Essence of Vedic Religion）』について、次のような正しい観察をしている。

「導師たちは皆同じ真理を見ているので、彼らの間には争いがあり得ず、また何か相違点があったと

しても、それがために争いになることはない。彼らは、そういう相違の中での一致を見ながらも、またそういう相違の現実を認識している。これがヴェーダの時代の姿であり、そこには多くの神々、多くの導師、多くの祭儀がありながらも、宗教の調和が育っていた。インドの伝統には、ヴェーダにさまざまの作品が含まれていても、その最後には、作者たちは皆、同じビジョンを抱いていたのだという信仰がある。とにかく、宗教における一致調和を維持しようという共通の意志は、この詩の終章に表されている。この最後の讃美の詞は、Samvanana（共通の意志）であるとされている。」

（著書『The Vedas』、Waltair 一九五七年、九七頁）

そして、この讃美の詞には、「リグヴェーダに含まれ、ヴェーダ宗教の本質を内包する詩」という前置きがある。その詩文を次に紹介する。

「ああ、力みなぎれる火よ、崇高なるものよ、汝はすべてを一つに統べる。
汝は絶えることなく聖なる祭壇に輝き、われわれすべてに恵みを持たらす。
ともに来たり、ともに語り合えば、互いに心も通じよう。
太古に神々もそうして互いを知り合い、分を分かち合ったように。
彼らの聖なる祈りも一つ、集いも一つ、そして、心に思うことも一つ。
その共通の聖なる祈りを汝らに唱え、共通の捧げ物をしよう。

汝らの希望が一つになり、汝らの心が一つになるように。
汝らの精神が一つになり、汝らの幸福が保たれるように。」

（リグヴェーダ　十／一九一）

（3）ウパニシャッドの根本教理

さて、ウパニシャド（奥義書）は、ヴェーダの最後の部分を構成する。そのウパニシャドの根本的教理についての結論は、「ウパニシャドで偉大なのは、何よりも、その哲学の基礎となっている根本的思想であり、すべてのウパニシャドを貫く根本的教理である。それは、『宇宙はブラフマン（Brahman,梵）であり、そのブラフマンはアートマン（Atman,我）である』という文に総括され、この言葉をわれわれの哲学的表現形式に置き換えれば、『宇宙は神であり、神はわが魂である』に等しい」と語ったモーリス・ウィンターニッツ（MauriceWinternitz）の言葉に表されている（『インド文学の歴史（A History of Indian Literature）』第一巻、カルカッタ、一九二七年初版、第二版一九七二年、二四七頁）。

彼は次のように説明する。「真のブラフマンは人間の英知（Purusa, 我知）、つまり真の自我（Ātman）においてのみ探求される。蜘蛛が自分の体から糸を出すように、また火焔からあらゆる方向に火の粉が飛び散るように、このアートマンから、あるゆる活力ある息吹や、あらゆる世界、あらゆる神々、あらゆる存在が出ずるのである。」（同文献　二五三頁　参照）

ショーペンハウエルの、「ウパニシャドは最高の人間の英知の結実であり、ほとんど超人間的な概念であり、

故にその創作者は、単なる人間とは考え難い」（M. F. Hecker 著『ショーペンハウエルとインド哲学（Schopenhauer und die indische Phi-losophie）』七頁）という主張に反対して、ウィンターニッツは、「ウパニシャドには超人間的な概念等は含まれず、かえって真理に近づこうとする人間的な、絶対に人間的な試行である。だからこそ、この経典はわれわれにとって非常に貴重なものなのである」（同氏、前記文献　二六五―六六頁参照）と考えている。

彼はまたわれわれに次のように述べる。

「ウパニシャドの神秘的教理から出て、ペルシヤのスーフィー教というイスラム教神秘主義へ、新プラトン主義の神秘神智主義的ロゴス論へ、アレキサンドリア・キリスト教徒からキリスト教神秘主義のエックハルトおよびタウラーの教理へ、そして最後には、偉大な十九世紀のドイツ人神秘主義者ショーペンハウエルの哲学へと、一筋の思想的流れが連なる。ショーペンハウエルは、インド民族から受けた恩恵について、彼自身十回以上表明している。彼は自ら、自分の師は、プラトン、カント、それにヴェーダ経典（ウパニシャド）であると述べている」（同文献　二六六頁）

ウィンターニッツはさらに続ける。「ウパニシャドの根本的な教理は、ショーペンハウエルによれば、『愚者の戯言と賢者の無限の冥想の両面を常に有する』という。つまり調和一致の教理は、『すべての多様性は見せかけに過ぎず、一見、この宇宙に何千何万という個体が存在し、お互いに違った様相を見せているとしても、しかし唯一にして真実に実存している存在があり、それがそれらすべての中に宿り現れている』というのである。かつて『現在の哲学は一元論であり、宇宙で起こる一切の事象を一つの調和統一の中に解釈し

ている』と述べたルードヴィッヒ・シュタイン（Ludwig Stein）の見解が正しいとすれば、この『現在の哲学』は、既に三千年前に古代インドの哲学にあったことになる」（同文献参照二六七頁）。

（4）一元論および調和の解釈について

さて、一元論はいろいろな解釈が可能である。Gaudapāda の ajātivāda（無生＝空説―「生滅変化無く、一切は空である」とする説）、Śaṃkarācārya の Māyāvāda（幻説―「宇宙は実体なく、ただ幻のようにあるだけ」とする説）、Rāmānujācārya の Śakti-vāda（性力顕現説―「梵＝ブラフマンを構成するシャクティ＝生殖能力が活動相となって、一切万物の中に梵を実現し、全宇宙はシャクティの発展顕現したもの」とする説）、あるいは私の著書『インド思想における唯物主義』の第九章「ヴェーダーンタ思想」や第三章「体系化以前のヴェーダおよびウパニシャド思想」で述べているような Sudhadvaitavadi Valabhācārya, Acintyabhedabhe-davadi Caitanya Mahaprabhu, Bhedabhedavādi Nimbāraka の Śrstivāda（化作世間説「神々の変化によって現象世界が生滅し変化する」という説）等がある。

調和一致の解釈についても、「絶対説」から「非二元論」「限定非二元論」「純正非二元論」「相違不相違不可思説」「相違不相違説」「二元論」等を経て、幾多の「相互関連説」（リグヴェーダに含まれる讃歌を参照）に至るまで、考え方の多様性に相対して、幅広いものがある。

「都是梵」「魂是梵」「我是梵」「汝自有」というウパニシャドの四つの偉大な言葉も、皆同じ意味を持ちながら、表現の展開においてはこのように多様性を見せている。例えば、Madhvācārya の二元論（Dvaitavāda）

も、一元論は否定しつつも、調和一致は是認しており、さまざまな「帰依（Bhakti, 信仰）」の関係を通して、調和統一を達成しようと探求している。

（5）業、前世果報の思想

「業（Karma）」の教理によって調和統一の達成を探求したインド哲学のPūrva Mīmāṁsā（過去思惟、前世果報）思想体系に見られるように、物質主義にまでも最大の役割を許している多神論的多元主義は、ヴェーダの初期の部分に基づいているばかりではなく、ウパニシャドからも多大な支持を受けている。

次に、この前世果報思想体系の一端を紹介する。これは例えば、「ある存在が来世に人間として生まれるか、魔鬼として生まれるか、神々の一人として生まれるかは、その人の過去の所業（Karma）によって決定される」というものである。これは、「かつては魔鬼も人間も神々も、共通の父であるプラジャーパティ（衆生主＝造物主）のところへ行き、より善き生活を送るための指導を受けたのだ」というウパニシャドの伝説に反映されていると考えられる。

その伝説によると、造物主はたった一言「da」とだけ命じた。その言葉を三者が各々に受けとった。自らの慈悲なき残酷さを誇りとする魔鬼は、それを「dayā（具悲ー慈悲心を備えること）」ととった。自らの富を積み上げることに熱心な人間は、それを「dāna（旦那ー施し与えること）」と聞いた。放縦と好色に耽る神々は、それを「dama（調伏ー自己を節制すること）」と聞いたという。

前世果報思想体系においては、専ら正義の達成、経済的幸福、欲望の充足という三つの理想を扱って、

apavarga（有滅）あるいはmoksa（解脱）といった救いの問題に関しては、ヴェーダーンタのウッタラ・ミーマーンサ（形而上学的思惟）に任せている。

（6）経典文学としてのプラーナ

ここで次に論述すべき一連のヒンドゥー経典としては、プラーナと叙事詩からなるものがあるが、プラーナはヒンドゥー経典文学でも、最も大切な一つの枝をなすものであり、ヴェーダの哲学宗教が持つエートスの真の重要さを、われわれに知らしめるために書かれたものともいうことができる。『インドの文化的遺産（The Cultural Heritage of India）』（Vol.V. p.64）にも、そのように書いてある。それらは満足の行くまで、原初的創造、周期的消滅の後の再創造、神々や開祖、聖賢、諸王の発生、さまざまなマヌ（人間始祖）たちの時代や諸王朝の歴史について述べようとしたものである。

基本的な（マハ）プラーナ（Mahā Purāṇas）は数にして十八篇ある。その他、補遺としての（ウパ）プラーナ（Upa Purāṇas）が十八篇ある。これらの作品は形の上で分かれているだけであり、それらの相互間には真の意味での分裂はない。それらすべての目的自体は、ヴェーダの真理を強調・増幅することだけにあるので、至高の存在としてブラフマ（Brahmā, 造物主）、ヴィシュヌ（Visnu,保存主）、シヴァ（Siva, 破壊主）の、トゥリムールティ（Trimurti, 三神一体）のどれか一つを扱うにせよ、すべての存在の調和一致を強調せざるを得ないのである。

ブラフマ・プラーナでは、例えばヴィシュヌは、マルカンデーヤに対して、自分がシヴァと同一であると

語り、パドマ・プラーナでは、ブラフマ、ヴィシュヌ、マヘシュヴァラは、形の上でこそ別々の姿であるが、本来一つの実体であると述べられている。ヴィシュヌ・プラーナは、ヴィシュヌとラクシュミー、およびガウリーが同一であるとしている。

(7) 二大叙事詩

(1) マハーバーラタ

二つの叙事詩の一方であるマハーバーラタについて正しく評価するならば、それはその内容の膨大さ故に、「一つの詩としての作品」というよりは、むしろ「一大文学作品」である。この作品は、最初は本質的に純粋で非宗教的であったが、後に、ブラフマンから出た神秘的口承伝説である神々の伝説や、膨大な量のブラフマンの法則についての教訓的説話がこれに加えられて、少なくとも千五百年前には今日あるような形になった。

では、何故インド人たちは、それを一叙事詩としての作品としてだけではなく、同時に、古き伝統に支えられた倫理、法、哲学の規範書と見なし、それに比類無き権威をおくのだろうか。ウィンターニッツの前記文献の導入部分を見てみると、「ヴェーダの知恵を表し、黄金の角の宝牛百頭を捧げてブラフマナを深く学ぶ者も、そして日々バーラタ（Bharata）の聖なる詩歌を聞く者も、こういう人々はいずれも同等の宗教的恩恵を賜る」とある。

さらに、「これは倫理徳目（Dharma）の聖なる規範書であり、また、実践的生活（artha,所業）における

最良の指導書であり、無限の知恵に満ちているその作者（Vyasa）は、救い（moksa,解脱）のための指導書としてこれを復唱している。この詩歌を人が聞くや否や、思いにせよ言葉にせよ所業にせよ、一切の罪悪がたちどころにその人から離れていくからである」とある。最後には、「そこに書かれていないことは、宇宙のいずこを捜しても、他のいずこにも書かれてはいない」とさえ書かれている（同文献　三二五―二六頁）。

マハーバーラタ（第六巻二五―四二）には、ヒンドゥー経典の中で最も有名なバガヴァッド・ギーター（Bhagavadgita）が含まれるが、これについてウィンターニッツは、マハーバーラタの教訓説話部分についての簡潔なまとめを出した後に、次のようにわれわれに述べている。

「マハーバーラタのすべての教訓説話部分の中で、バガヴァッド・ギーター、すなわち『主の歌』ほどに人気と名声を博したものはなかった。インド全国において、バガヴァッド・ギーターほどに読み親しまれ、高く評価されている書もめったにない。それはヴィシュヌ教派のバーガヴァータ聖典ではあるが、どの宗派であれ、すべてのヒンドゥーの民にとって、あるいはインド以外の地の人々にとっても、信心と教化の書なのである。こうしてバガヴァッド・ギーターは多くの称讃者を得ている。」（同文献　四二五―六頁）「信仰と知識と行為が均り合った生活様式」を通して達成される「無欲なる所業の完成された美徳の境地」と「知恵における完成された不動の境地」の哲学を伴うバガヴァッド・ギーターは、人間をして「すべての善のための行為に励む」ように鼓舞せしめるのである。

(2) ラーマーヤナ

叙事詩ラーマーヤナ(Rāmāyana)は、サンスクリット古典言語の最初の詩人と見なされているヴァールミーキ（Valmiki）によるもので、名声高く、また華麗なる作品である。さまざまの宗派の教師や指導者たちが、このラーマーヤナを引用して、倫理的、宗教的教理の宣伝に用いている。Kalidas や Bhavabhuti のような詩人たちも、偉大な作品をつくるのに、それを引用している。前にも述べたラーマーヤナのヒンドゥー語の句説については、ウィンターニッツが次のように述べている。「宗教的哲学的なヒンドゥー語の詩である Rāma-carita-mānas は、古代の叙事詩に基づいて、紀元一五七四年頃に、誉れ高き詩聖トゥルシダス（Tulsi Das）によってつくられた作品であるが、何百万というインドの民にとって、ほとんど福音のような存在にさえなっている」（前記文献　四七七頁）

ヒンドゥー経典が、どれほどに調和統一という考え方を支持しているかを示すために、このラーマ・カリタ・マーナスの一節をここに紹介しよう。

「宇宙をラーマ（Rāma）とシータ（Sita）の化身と見なし、
私は両手を組んで拝する。」

ここで、この物語の主人公であるラーマは、保存主ヴィシュヌ神の化身であり、ヒロインであるシータは、ヴィシュヌ神の妻であり豊穣の女神であるラクシュミ神の化身であるとされており、ここに神と富が併せて崇拝されているのが見られる。

仏教経典については、正典および非正典併せてパーリ語で書かれたもの、またサンスクリット語で書かれた小乗仏教の作品である Tripitaka、大乗仏教の中の九つの経典や、Sanddharma pundarīka や Lanka-Vatarasutra のような Vaipulyasutras、その他タントラについてのもの等はすべて、文字の上でも精神の上でも、ヒンドゥー経典である。

ウィンターニッツはこれについて次のように説明している。「インドで生まれた仏教を、ヴェーダを知らない者が理解するということは、未来永劫決してあり得ないであろう。ヴェーダとブッダの教えとの関係は、旧約聖書と新約聖書の関係と同じである」（同文献　五二頁）。両者ともに、有説、空説、識説の三説のいずれをも貫く、無常、無我、縁起を支持しつつ、「宇宙流転」の哲学を展開することにより「存在の調和」を推進している。

(8) ジャイナ教経典

ジャイナ教経典には、Svetambara 派が認めるものとしては、十二部と十二補遺部、十の Prakiranas、六つの Cheda Sūtras、二つの Cūlika-Sūtras と四つの Mūla Sūtras があり、その他に Digambaras 派が取り入れているもの等がある。正典・非正典を問わず、それらの宗教的経典は、すべて「生きる存在すべての調和」を唱えている。

例えば、ジャイナ経典の中の Ayāramga-Sūtta から取った次のような一節を見ると、このことが非常に明確に確認される。「だから私は言う。過去・現在・未来のすべての聖人たち（Arhats）や主神たち（Bhagavats）

は悉く、『人間は、いかなる種類の生き物も、いかなる種類の被造物も、いかなる種類の魂ある存在も、いかなる存在も、殺したり、いじめたり、傷つけたりしてはならない』と明言・公言・宣言してきた。それは、宇宙を悟った聖賢たちによって宣言された、純正で永遠に続く宗教的命令である。」

「汝自身が、汝が殺そうとしているその人であり、
汝自身が、汝がいじめようとするその人であり、
汝自身が、汝が傷つけようとしているその人であり、
汝自身が、汝が苦しめようとしているその人であり、
汝自身が、汝が迫害しようとしているその人であったら、どうするのか。
だからこの知恵に気ずき、それに従って生きている正しい人は、
決して殺したり、またそういう原因を作ったりしない。」

ジャイナ経典Bhaktamara-Stotra（ある不滅の帰依者の賛辞）の二五節では、ジャイナ教祖師Rsabhaを、次のようにほめ讃えている。

「汝は仏陀となり、諸天、汝の魂の目覚めたるを讃ず。
汝は自在天（Samkara）となり、三界の世の救いを成就せり。

汝は造物主となり、衆生の教えの基いとなし、救いの道を開かん。
汝はまさにあらゆる存在中の至高なるお方。」

（9）諸宗教の調和と神

以上、実に、ジャイナ教、仏教、シーク教、シヴァ派、ヴィシュヌ派、シャクータ派、その他の間の調和統一への試みを反映している。興味深いことは、インド哲学諸学派の伝統的な分類に相応して、仏教およびジャイナ教の哲学は無神論的（nastika）といわれているが、それは神を受け入れていないためというよりも、ヴェーダの権威を受け入れていないためであるということである。

さらに一層興味深く、また奇妙なことは、ヴェーダを根源とするといわれているヴェーダーンタ、プールヴァ、ミマーンサ、シャーンキャ、ヨガ、ニャーヤ、ヴィシェーシカの六つの学派の内、第一のものは、その展望においていささか神の領域を超えており、第二と第三は公然、歴然と無神論的であり、そして残りの三つにおいては、創造の神を受け入れるのか否かという論争がある。このように「神」は、インドの諸宗教の間では、調和統一の源ではないのである。